

第 22 回フィロロギカ研究集会

2023 年 10 月 14 日 (土)

ハイブリッド開催
於 成城大学

発表要旨

アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』第 3 巻 426 行 κερδαλέοισιν と
英雄イアソンによる調和について

矢野 愛美

学匠詩人アポロニオス・ロディオスは『アルゴナウティカ』を創作する際に、ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』の言語表現・物語内容を踏まえたうえで、それを模倣・改変し用いることで、独自の叙述を生んでいると考えられる。とりわけ、その叙述により創造された英雄イアソンの人物造形は、『イリアス』『オデュッセイア』とは異なる特色をもつものとして、近代の研究者たちからの注目を集めてきた。本発表においては、第 3 巻 426 行 κερδαλέοισιν に焦点を当て、イアソンの人物造形を踏まえることで、この語が如何なる意図により用いられていると言えるのかを論じる。

イアソンらアルゴナウタイは、黄金の羊毛の持ち主であるアイエテスと対面すると、黄金の羊毛を手に入れたければ、試練を成し遂げてくるようにと命じられる (*Arg.* 3.401-421)。その自らの手に負えない試練を聞いたイアソンの反応は、沈黙し考えを巡らせた後に「ὄψε δ' ἀμειβόμενος προσελέξατο κερδαλέοισιν· (3.426)」と描写されている。ここでイアソンによる承諾の言葉に対して、κερδαλέοισιν という表現が用いられていることは、一見不可解である。というのも、この後にイアソンの様子は「なす術なく打ちひしがれて言った (φάτ' ἀμηχανίη βεβολημένος 3.432)」「深く悲しむ (ἀσχαλόωντα 3.433)」等と表現されており、言葉通りに理解すれば、自らの手に余る試練が課されたことに打ち負かされ、悲嘆する彼が述べた言葉が、κερδαλέος つまり「狡賢い」或いは「賢明な」ものであるということになる。しかし、Fränkel (1968) が指摘したように、ここでイアソンが述べる言葉には「彼の承諾の表現から、どのような隠された利点が期待されていたということになるのかははっきりしない (p.352)」。この疑問を解決するために先行研究では様々な案が出されているが、本発表では、Campbell (1994) が示した、『オデュッセイア』におけるオデュッセウスによる「狡

賢い成功 (crafty success)」をほのめかすような単語の使用であると同時に、戦術的に有利になるようにするという思慮深さを意味するという説明を支持した上で、この場面において κερδαλέοισιν が用いられた意図を、イアソンの人物造形と関連付けることで、より積極的に示したい。そのための手掛かりは、本場面でイアソンは『オデュッセイア』第9歌においてキュクロプスと対峙するオデュッセウスを想起させるように描き出されている点、イアソンは本叙事詩において、交渉の場で相手の感情を落ち着かせる役割を担うことが期待されている点である。アポロニオス・ロディオスは、ホメロス作品における英雄たちによる戦闘場面を連想させるような語彙を用いてイアソンの姿を描写するが、しかし実際にはイアソンは戦闘を行わず、調和をもたらす役割を担うという結果になる場面を描き出すことがある。本場面も、そのような場面の1つであると位置付けることを試みる。

『イリアス』第1巻200行の読みについて

妹尾 優暉

II. 1.200 “δεινὸν δε οἱ ὄσσε φάανθεν”はアガ멤ノンと口論になったアキレウス (Ach) のもとに女神アテネ (Ath) がやって来て、「その目はおそろしく輝いた (あるいは動詞を「...のように見える」ととれば「おそろしく見えた」)」という場面である。本行において、(1)oi が何を意味するのか、(2)その目が誰のものなのかという読みの問題がある。oi の与格を属格的働きととれば、Ath あるいは Ach 「の (目)」を指していると考えられる。他方、φαίνομαι の間接目的語として (...「に対して」輝いた/...のように見えた) とすることも可能である。従来は oi を属格的にとり、これは Ath を指しているとする解釈 (i.e. 「彼女の目が...」) が多かった。しかし古注にも「これは英雄 (=Ach) の目である」とあり、「Ach の目」と読む解釈は少なくとも古代から存在する上、近年では積極的にその可能性が論者たちにより示唆されている (e.g. Turkeltaub)。

「Ath の目」と読む解釈の根拠として、Ach が彼女の目を見たがために Ath と気づいたから、とするものがある。これの類似例としてヘレネがアプロディテに気づいた場面 (II. 3.396-7) が挙げられることがある。しかし、その場面は老婆に変装したアプロディテの正体をヘレネが見抜く場面であり、変装していない Ath との遭遇場面として適当な類似例とは言えない。加えて Ath は Ach のみに姿を見せ、他の者には意図的に見えなくしている (II. 1.198) ことから、Ach が Ath を認識するための外的なしるしが必要であるとは思われない。また、「Ath の目」と読む根拠として、彼女のエピセツトである γλαυκῶπις が目の輝きを指しているとするものがある。確かに、II. において神々の目がしばしば輝くと言われるが、しかし「目が輝く」のは神々に限らず、怒りを露わにする際に英雄たちも目を輝かせる (e.g. 1.104;

19.15-7)。さらに、「Ath の目」と解する根拠として、「おそろしく輝いた/おそろしく見えた」対象、つまり「誰に対しておそろしかったか」というと、Ath の目が Ach に対しておそろしかったと解するのが自然であり、それゆえ「Ach に対し」という間接目的語たる与格の *oi* を要求する、と思われるかもしれない。確かに、「おそろしい (*δεινός*)」という形容詞が誰に対してそうなのかを明示する方が自然に思われるかもしれないが、しかし、*II* における *δεινός* の用法を検討すると、必ずしも対象を明示する必要はないということがわかった。

本報告では以上の議論を踏まえ、この *oi* を(1)属格的機能であり、(2)「Ach の(目)」を指していると論じる。「Ath の目」と読まなくともよい消極的根拠に加え、英雄たちの目が輝くという定型句の存在、*II* 第 1 巻のトピックである Ach とアガ멤ノンの諍いという背景、さらに *II* における Ach の character を総合的に考慮すると、「Ach の目」と読むのがふさわしいという積極的根拠を示すことが目的である。

Turkeltaub, D. (2005) “The Syntax and Semantics of Homeric Glowing Eyes: “Iliad” 1.200”, *The American Journal of Philology*, 126: 157-86.

* * * * *

Rutulum rector: シーリウス・イタリクス『プーニカ』16.141

高橋 宏幸

『プーニカ』終盤近く、スキューピオーは「ルトゥリーの指揮官」(Rutulum rector 16.141) と呼ばれる。この表現から第一に思い浮かぶのは『アエネーイス』でのアエネーアースの宿敵トゥルヌスであろう。とすると、なぜローマを危機から救う指揮官にそうした建国事業を危うくした敵を想起させる呼称が用いられるのか。本発表はこのような立問から、Rutuli の複数の含意と固有名をともなう「指揮官」(doctor/dux/rector)の用例とを検討したうえで、その結果を当該表現の現れる文脈と照らし合わせるという手順で考察を進める。

『プーニカ』の中で Rutuli は、とくに作品後半では相当数の用例がもっぱら「ローマ人」の含意で使われており、そのかぎり、スキューピオーが第 16 歌で Rutulum rector と呼ばれることにそれほど違和感はない。しかし、この語は、本来のラティウムの古民族、そこから植民したサグントゥム人の意味で使われる他、トゥルヌスの父王ダウヌスを通じてカンナエのあるアプーリア地方の一部ダウニア、また、そこでダウヌスの婿となりアルギュリパ/アルピーの都を建てたディオメーデースとの関連を示唆する。

固有名をともなう「指揮官」の例は数も種類も非常に多いうえに、用いられる人物も多岐にわたり、確かなことを言うのは難しいが、中には一定の詩作意図、ないし、ある程度の差異化が窺われる場合もある。

「ルトゥリーの指揮官」は、それまでカルターゴ側についていたヌミディアの王マシニ

ッサが予兆にも導かれ、スキープイオーと同盟を結ぶべく語りかけた言葉の中に現れる。ここで結ばれた盟友関係はまれに見る強固さを保って持続した。この敵対関係から強固な盟友関係への転換という面に着目すると、まず、アエネーアースとディオメデーヌのあいだにも類似したところが認められ、シーリウスはこの面を強調しているように見える。というのも、ディオメデーヌは、『アエネーイス』では再びトロイア軍と戦うことを拒んだというだけだが、『プーニカ』では自分からアエネーアースにバッラディオンを届けて和解を乞うからである。また、『アエネーイス』においては、トロイア人とルトゥリー人とはやがて永遠の平和を保つ定め(Aen. 12.504)とされながら、アエネーアースのトゥルスヌスに対する激しい敵意をもって作品が終わっているのに対し、『プーニカ』は言うまでもなく両方の民が統合したあとを描いている。のみならず、ルトゥリー人が植民したサグントゥムはみずから破滅するまでローマへの忠誠を貫いているので、そこにはルトゥリーに強固な盟友関係のイメージが重ねられているようにも見える。

以上のような検討を経て、この表現に「敵」を「友」として確固たる平和を達成する指揮官」といった含意が込められていることを述べてみたい。

黒い水の泉について (II. 9.14–15, 16.3–4)

大塚 英樹

「一同が愁いを抱いて会議の席につくと、アガ멤ノン¹は涙を流しつつ立ち上がったが、そのさまはさながら、*水黒く淀む泉が、切り立つ岩を伝って黒ずんだ水をしたたらずよう、アガ멤ノンはそのように、激しく呻くが如き声でアルゴス勢に向かっていうには、」

¹山中の泉は、木陰で暗く、また水藻などのせいで黒ずんで見えるところから。

(松平千秋訳)

πετρα は、多くの場合、岩壁を意味する。ギリシャ人が *κατα πετρας* と言った場合、その *πετρα* は、自殺や処刑の場になり得る高さの絶壁である。つまり、人が恐怖を覚え、落ちたら確実に死ぬような高さの断崖である。*κατα πετρας* は、そのような崖の天辺から真下へ、という意味の前置詞句である。この崖を上り下りすることは、人であれ、ニフであれ、基本できない^{*1}。詩人の言う「黒い水の泉」は、この崖の天辺にあることになる。そして、その「泉」から出た「黒い水」が崖下へ落下している。これは日本で言うところの「滝」である。詩人は、立ったまま涙を流す偉丈夫の姿を「滝」になぞらえているわけである。だが、そのような滝は、降水量の少ないギリシャでは稀である。そのため日本語の「滝壺」や「滝口」に当たる語が、ギリシャでは発達しなかったのであろう。詩人はこの滝口の意味で

κρηνη という語を用いているのである。

だが、滝の水は基本白色である。ところが、詩人はこの水を *δνοφερον* と呼んでいる。なぜであろうか。その説明として、まず、次の可能性が考えられる。すなわち、詩人にとって水の色は基本黒であり、そのため *δνοφερον* という語が、現実の滝とは無関係に用いられたという可能性である。そして、これは、*χρυσηλακατη* という形容詞が、矢とも紡錘とも無縁の女神に対し用いられるのと同類の現象と考えられる^{*2}。

だが、その一方で、詩人はそもそも滝を見たことがなく、ただ伝聞に基づいてそれを描写しているという可能性もあると思われる。では、その伝聞の元となった滝は、いかなる滝であろうか。本論では、その滝について考察したいと思う。

*1 だがローマには、かつてカピトリウム丘の *πετρα* を勇敢にも上り下りした若者がいた。ガリア人によるローマ占領の際の出来事である (*Diodorus* 14.116)。

*2 フィロロギカ 18 号では、この *χρυσηλακατη* の *ηλακατη* が「葦」の意味であるとの示唆が行われている。たしかにその可能性はあろう。しかし、その場合、*χρυσηλακατη* の意味は「黄金の葦茂る」の意味のはずである。そして、それが修飾し得るのは、その葦が茂る川や湖などの場所か、それらの場所と同一視される神の名のほうである。そもそも「黄金の葦の」の「の」は、どういう意味なのであろうか。「銀の弓の」の「の」は銀の弓を所有しそれを愛用するの意味であろう。「黄金の角の」の「の」は黄金の角が生えたの意味であろう。*χρυσ* で始まる語が神を修飾する場合、*χρυσ* より後の部分は、通常神の持ち物か、神の体の一部のはずであるが。

Diog. Laert. VI 63, 72 の *κόσμος* :

シノペのディオゲネスの「世界市民主義」を再考するために

長尾 柗輝

「どこの出身かと問われ、彼 [sc. デイオゲネス] は答えた。「“*κοσμοπολίτης*” (旧来訳: 世界市民) だ」 (*Diog. Laert.* VI 63 = *SSR* V B 355)。「“*έν κόσμω*” (旧来訳: 世界規模/世界的) な国制こそが唯一正しい国制である、と [ディオゲネスは主張した]」 (*Diog. Laert.* VI 72 = *SSR* V B 353)。

上に示した *Diog. Laert.* のきわめて簡潔な記述は、シノペのディオゲネスの「世界市民主義」を示す最も基本的な資料として、これまで繰り返し参照されてきた。その一方で、ディオゲネスを積極的な「世界市民主義者」と見なす立場に対しては、19 世紀このかた、懐疑的な声も根強い。概してそうした懐疑論は、「ディオゲネスに建設的な政治思想を帰すのは他の資料と整合しない」という内容面の配慮からくるものである。しかしながらこの種の反論に対しては、「それではなぜディオゲネスは (たとえば *ἀπολίτης* などではなく) *κοσμοπολίτης* という語をわざわざ用いたのか」というきわめて素朴な (それゆえに強力でもある) 再反論が容易に成り立つ。加えてそもそも、ディオゲネスの思想内容を再構成する作業がそれ自体として困難をきわめる以上、反論者たちが持ち出す「内容面の配慮」は、常に決定打を欠いたものであらざるをえない。かくして論争は、不毛な堂々巡りに近い様相を呈してきた。

このような状況にあって本発表は、κοσμοπολίτης および ἐν κόσμῳ の二句をいわゆる「世界市民主義」とは無関係の仕方を読むことが翻訳のレベルにおいて可能であり、かつ、望ましいということを示したい。世界市民主義を持ち出さずとも冒頭の引用箇所は十分「面白味」のある文章であり、そこには正統のキュニコスのレトリックが見出されうる。したがって、当該箇所を「ディオゲネスの世界市民主義」へと短絡する従来の読み筋は、哲学的解釈以前の段階ですでに再考を要するものだと言わねばならない。

本論の構成は以下の通りである。第一に、議論全体の準備作業として、古典期における κόσμος の用例を整理する。その結果、「世界」や「宇宙」といった意味での κόσμος が、特定のサークルに固有の逸脱的用法であった旨が示される。「世界」や「宇宙」としての κόσμος を留保なしで語ることは、少なくとも紀元前四世紀のアテナイにおいて、なおも躊躇される傾向にあった。そのうえで第二に、κοσμοπολίτης という語の内実を検討する。上述の用例分析を踏まえるかぎり、κοσμοπολίτης を「世界市民」以外の仕方理解することがもし可能であれば、そちらのほうをより自然な解釈として優先すべきであろう。最終的に本発表は、「秩序市民」・「装飾市民」・「天空市民」（とりわけ第三者）といった訳語を擁護する運びとなる。そして第三に、ἐν κόσμῳ という連語の内実を検討する。当該連語の古典期における用例は、すべて「整然と」「秩序よく」といった意味を示しており、「世界市民主義」の面影はつゆほども認められない。したがって冒頭の引用箇所でも、ἐν κόσμῳ はそのような仕方解釈されるのが自然である。かくして本発表は、*Diog. Laert.* VI 63, 72 の記述が、訳解のレベルにおいてすでに「世界市民主義」とは無関係のものであった可能性を指摘する。